

SHOW HEYシネマルーム

★★★

アリ (ALI)

2002 (平成14) 年5月25日鑑賞

Data

監督: マイケル・マン

出演: ウィル・スミス/ジェイミ
ー・フォックス/ジョン・ボ
イト/マリオ・パン・ビーブ
ルス

👁️👁️ みどころ

アス・クレイをなぜモハメド・アリと改めたのか?そこには1965年に射殺されたマルコムXとの交友があった。そして1965年2月北爆開始。アリはベトナム戦争に反対し徴兵拒否。そして5月、ボクシング・ライセンスとタイトルを剥奪された。アリは単なるヘビー級チャンプではなかったのだ。1970年代のアリとジョー・フレイジャーやジョージ・フォアマンとのタイトル戦のすごさはマイク・タイソンの比ではなかった。もっとも、1976年のアントニオ猪木との格闘技世界一決定戦は肩すかしだったが……。団塊の世代の男性の目に焼きついているモハメド・アリの姿の再現に、ただただ感動……。

＜モハメド・アリを知っているか?＞

今なぜ、あの世界ヘビー級チャンピオンのボクサー、モハメド・アリの映画化なのか?よくわからない。パンフレットでは、写真集「モハメド・アリ:30年の旅」などを出版している世界的に有名なハワード・ビンガムという写真家が、この映画化のために11年間出資を続け、製作総指揮をとったとのこと。要するに、モハメド・アリという人物に対する「興味」が、この映画製作の原動力になったということだ。

今時の若者に、ボクシングの世界ヘビー級チャンピオンのモハメド・アリ、またの名をカシアス・クレイを知っているかと聞いても、そのほとんどが知らないだろう。マイク・タイソンを知っている若者も少なくなっているはずだ。現に私が映画を観終わって、エレベーターを待っている間、ある若いアベックの会話を聞いていると次のとおりだった。

「ねえ、あんたアリって知ってる?」「お前、アリ知らんのか!昔、アントニオ猪木と格

闘技やってたやんか！猪木は知ってるやろ」「それも知らんワ」・・・。

この男性は今流行の「K-1」のファンかもしれない。そうでなくても、一般的な若い男性の情報として、ボクシングの世界チャンピオンくらいは知っているだろう。しかし女の子は、この子のように全然知らなくても当然かもしれない。こんな若いアベックが今たくさんいるわけだ。

そんな時代状況の2002年5月、『アリ』が上映された。

<アリは単なるチャンプではない！>

1964年、22歳の若さで世界ヘビー級チャンピオンになったカシアス・クレイの運命は、その後、次の三つの事件で大きく揺さぶられることになった。第一は、1965年2月、アリの親友であり、アリの思想形成に大きな影響を与えた、黒人解放運動の指導者であった「マルコムX」が、演説中聴衆の目の前で射殺されたこと。第二は、1965年、アメリカが北ベトナムへの空からの爆撃を開始し、以降、泥沼に突っこんでいったこと。第三は、1966年、アリに届いた徴兵通知に対して、アリが徴兵拒否の姿勢を貫いたため徴兵拒否で起訴され、1967年、5年の禁固刑と1万ドルの罰金という最も重い有罪判決を受け、これによってボクシング・ライセンスを剥奪されてしまったことだ。

<モハメド・アリと私>

1965年2月といえば、私は高校1年生。愛媛県松山市内の愛光学園という男ばかりの6年制一貫教育の進学校で、受験体制そのものに対する多くのうっぴんをもち、何らかのはげ口を求めながらイヤイヤ受験勉強の毎日を過ごしていた。そんな生活の中で、ベトナム戦争の開始とその激化を対岸の火事としてながめ、また、「蝶のように舞い、蜂のように刺す」カシアス・クレイという、今まで見たこともないヘビー級ボクサーの姿に、胸をワクワクさせていたものだ。

そして、大学に入り、司法修習生を経て弁護士となった1960年代末から1970年代はじめにかけて、私はアリとジョー・フレイジャーとのタイトルマッチ、アリとジョージ・フォアマンとのタイトルマッチを何カ月も前から期待して見守ったものだ。そして1976年、日本武道館において行われたアリとアントニオ猪木との格闘技世界一決定戦。これは弁護士になって2年目。仕事を放ったらかしてテレビに釘付けになったものだ。

1980年、38歳となったアリはラリー・ホームズとのタイトル戦に敗れ、1981年に引退するが、その直後の1984年にパーキンソン症候群となり、長い闘病生活を余儀なくされた。しかし、その後もアリが世界的スターとしてさまざまな社会活動に参加していることは新聞等で報道されている。そして2002年1月、アリはボクシングの知名度を高めたことや、多くの社会活動での功績が認められて、ハリウッドの殿堂入りを果た

している。

<三つの視点から見るアリの人物像>

アリという人物を語るについては、次の三点が重要だ。

第一は、ボクシングの強さ。これは世界ヘビー級チャンピオンだから当たり前だが、何よりもアリのボクシングを表現するのは「蝶のように舞い、蜂のように刺す (Float like a butterfly, Sting like a bee)」という言葉。当時、カシアス・クレイと名乗った若きボクサーが、その巨体を軽々と動かし、フットワーク軽くリング上で「ダンスする」ということは、常識では全く考えられない、後にも先にもアリ1人だけのボクシングスタイルだ。

第二は、人種差別と闘う黒人としての姿だ。過激黒人イスラム教団体である「ネイション・オブ・イスラム」の若き指導者マルコムXの人物像は、1992年に公開された3時間22分の超大作映画「マルコムX」にたっぷりと描かれている。人種差別の強い南部の町で生まれ、黒人差別と闘うアリにとって、マルコムXは兄貴分の存在で、よき相談相手であった。1964年、22歳で世界ヘビー級チャンピオンとなったカシアス・クレイは、その翌日、「ネイション・オブ・イスラム」に入信し、その最高指導者イライジャ・モハメドから、「カシアス・クレイ」は抑圧者が名付けた名前だとして、新しい名前「モハメド・アリ（「賞賛に値する人」という意味）」を授けられ、周囲の反対を押し切って改名した。以降、モハメド・アリは一貫して黒人差別と闘い続けたのだ。

第三は、「世界一強いこの俺が、外国（ベトナム）の弱い奴らを殺すことができるか！」という、アリの人生観・信念の強さだ。ベトナム戦争に突入した当時のアメリカは、あくまで「強いアメリカ」であったし、ベトナム戦争は「正義の闘い」であった。したがって、若者は「愛国心」に満ちあふれ、国家のために一身を捧げることに躊躇する者は少なかった。しかし、アリはそうではなかった。アリは、「なぜ、この俺が遠いベトナムの地でお国のためだと言って、貧しい人たちを殺さなければならないのか！」と叫び、徴兵を拒否したのだ。アメリカのヒーロー、いやアメリカの世界的ヒーローが徴兵拒否で有罪になることは大きなイメージダウンとなるため、関係者はさまざまな妥協案を提示したが、アリは断固としてこれを拒否。ついに1967年、連邦大陪審で有罪の判決を受け、禁固5年、罰金1万ドルという最高刑を言い渡された。そしてこれにより、アリの生命ともいべきボクシング・ライセンスも剥奪されてしまった。このようにアリは、ボクシング界から追放されながらも、莫大な費用とエネルギーを費やして上訴手続をとってあくまで徴兵拒否を貫き、裁判闘争を続けた。そして1971年アリは、最高裁判所で無罪の判決を獲得し、奇跡的に再びリングに復帰したのである。

このように、ボクシング選手として最も伸び盛りの時期に、ベトナム戦争、徴兵拒否という大問題に直面しながら、アリは自己の信念を曲げなかったのである。

<フレイジャーそしてフォアマンとの死闘>

念願かかって、やっとボクシング界への復帰を果たしたアリは、1971年、ジョー・フレイジャーとの世界ヘビー級タイトル戦を迎えた。自信満々のアリ。しかし、神はここでアリに「試練」を与えた。すなわち、不敗神話を誇っていたアリはこのタイトル戦で敗れ、世界ヘビー級のタイトルを奪われたのだ。そしてここから、本当に人間らしいボクサーとして、アリのタイトルを目指す闘いが、再び開始したのである。

この映画のハイライトは、1974年、ザイールの首都キンシャサで行われたアリとジョージ・フォアマンとの全世界に衛星放送で中継され、「世紀の一戦」と呼ばれたタイトル戦。足が重く、昔のように「蝶のように舞う」ことができないアリは、ロープを背負い、一方的にサンドバックのように打たれ続けた。しかし・・・、実は、これはアリの作戦だった。つまり、ロープの「しなり」を利用して、フォアマンの強打を緩和させながらひたすら耐える、そしてフォアマンの「打ち疲れ」を待って、一気に反撃する。そんな夢のような作戦が本当に可能なのか・・・？しかし、奇跡は第8ラウンドでおこった。突如、反撃に転じたアリのパンチが次々とフォアマンの顔面に炸裂し、フォアマンは大木が倒れるようにゆっくりとダウンしたのである。

<ボクシング映画の面白さ>

ボクシング映画の名作は、何といてもシルベスター・スタローン主演の『ロッキー』（1976年公開）。これは単純だが、ひたすら愛と感動に浸ることができる名作だ。主題は全く同じまま、パターンを変えて、第5作までつくられたがすべて大ヒットしている。また、昔の日本のボクシング映画には、石原裕次郎主演の『勝利者』（1957年公開）がある。ナイスガイ裕次郎の初期の名作で、今は裕次郎の未亡人となった北原三枝との共演作だ。こんな昔話はさておき、この『アリ』は単なるボクシング映画ではなく、カシアス・クレイという名前をもった黒人ボクサーの思想と信念が、ベトナム戦争の時代の中でいかに苦悩したか、そしていかにしてこれ乗り越えてきたかを見ごとに描いており、そこにこの映画の価値があると思う。

1970年代、モハメド・アリの試合に熱中した団塊の世代の私たちは、アリのボクシングを通じて人種差別やベトナム戦争問題を、今の若い人たちに語り継いでいかなければならないと思わせてくれた、いい映画だ。

2002（平成14）年5月31日記